

1 はじめに

難経・33難・六四難との出会い

かつて、選経選穴と言え、難経18難を基盤とした比較脈診による虚実判定と69難の相生選穴、68難の病症選穴が主体と成り、特種な例として75難の相剋選穴が行われていました。しかし、臨床の場において陰経から補っても脈が浮かない患者に対して、思考錯誤し、先輩を捕まえては其の解決策を尋ねるのですが「我未だ術を得ざる成り」とて、納得のいく解答が得られませんでした。

何とか良い方法がないものかと思案し、難経を読んでいると、33難・64難に遭遇したのです。「陰経と陽経の五行配当が違う、しかも相剋関係に成っている、之に理由が有るはずだ!」。そう思って何度も読み返すうちに、これこそ私が現在悩んでいる陽虚証の患者に使える、と言う結論に達した。

其の臨床応用は、漢方鍼医第2号をご覧頂きたい。

2 池田武雄先生の講演テープを拝聴して

64難を陽虚証の症例に対して臨床研究している頃、私に取って「天の声」とも言うべく貴重なテープを高橋清市先生からいただいた。其の内容をここにしておく、33難及び64難の剛柔選穴が、なぜ陽虚証か?の説明にかえたい。

「陽虚の直し方は33難に有ります。五行の木火土金水には、それぞれ陰陽が有ります、其の陰陽を相剋的にとらえている人が非常に多いのです。金（肺）が木（肝）を攻めると言う考え方はごもっともですが、実は、金（肺）の陽の気を木（肝）の陰の気が吸い取るんだと言うことを考えて頂きたいのです。其の吹方が止まった時が陽虚の状態なんです。又、木が土を攻めます、其の時には、木の陽の気を土の陰の気が一生懸命吹よんね、其の吸う気が無くなった状態が脾の陽虚証です。従って脾虚陽虚証を例に取って見ますと脈状が沈弱で、シンドイシンドイと言いなながらも夏の暑い時期でも脾を補っても一向に脈が浮かないでしょう。季節の脈に成らないでしょう。其の時は肝（木）の陽の気を脾（土）の陰の気が吸え無いのだからそれを吸えるようにして上げるんです。つまりどうするかと言うと、胃経の木穴を補うのです。それでも治らなかつたら木経の土穴を補うのです。そうしたらきれいな季節の脈に成りますから。それが陽虚の直し方なんです。陽虚の直し方のミソはここにあるんです」。

「相剋は、相手を攻めると言う考えは、おやめに成って頂きたいのです。相手の陽の気をこちらの陰の気が吸い込んで陰陽のバランスを取っているんです。陰気が相手の陽気を吸う力が少し衰えた時が陰虚証で、全く吸えなく成った状態が陽虚証です」。

「陽虚にも種類が有り、脾虚陽虚証の時は右手の寸関尺が左手の寸関尺より脈が沈む。左右共に沈んだ時も脾虚陽虚ですが、肝の陽気も虚しているの、肝経の木穴を補いたいのだが、ここは井穴で気が少ない為、胆経の木穴か胃経の木穴を補って陽気を養うのです。反対に左手の寸関尺が右手の寸関尺より沈んでいる場合は、肝虚陽虚証に成るので金経の陽気を木経の陰気が吸うのを忘れているのです」。

以上が33難剛柔選穴の基本です。（池田武雄先生の講演テープより）

これは井上先生が御存命中に、陽虚証の治療として「誰にも教えていない事だが」と前置きして伝授したそうです。

3 64難剛柔選穴の基本

上記選穴論を参考に選穴の序列をまとめると次の様に成る。

①肝虚陽虚証

ア) 胆経（井金穴）竅陰 → 大腸経（輸木穴）三間

イ) 相剋経の肺虚陽虚を伴う場合 → 大腸経の（井金穴）商陽

②脾虚陽虚証

- ア) 胃経（輸木穴）陷谷 → 胆経（合土穴）陽陵泉
イ) 相剋経の肝虚陽虚を伴う場合 → 胆経（輸木穴）臨泣

③肺虚陽虚証

- ア) 大腸経（經火穴）陽谿 → 小腸経（井金穴）少沢
イ) 相剋経の心虚陽虚を伴う場合 → 小腸経（陽谷）

④腎虚陽虚証

- ア) 膀胱経（合土穴）委中 → 胃経（榮水穴）内庭
イ) 相剋経の脾虚陽虚を伴う場合 → 胃経（合土穴）

以上は、基本と成る選穴法をまとめたものです。実際の臨床は、この通りに都合良く行かないのが常であります。

4 私の選穴の手順

- ① 48難の脈診、病症、触診における虚実を総合判断し、陰虚証ならば水穴か火穴（陰気を補い虚熱を押さえる）。陽虚証ならば土穴か金穴（気血の製造元を補う、又は、陽気を盛んにして寒症状を取り除く）を使用するのが原則です。
- ② 取穴して脈状に変化の無い場合は、反対側の同じ穴を取ります。例えば、腎虚陽虚証とします。治療側を定め、太谿（輸土原穴）に補鍼する、
- ③ 48難の定めに変化が無ければ、反対側の太谿に補鍼する。
- ④ それでも48難に変化を及ぼさない時は、金穴を同じ要領で使う。
- ⑤ それでも駄目なら64難の剛柔選穴を応用します、胃経三里（合土穴）が有効です。
- ⑥ 次に証が違ってないかを62難及び48難等を考慮して再検討する。

ともすれば最初の刺鍼で脈状に変化が無いからとて、直ぐに証を変える人がいますが、証の見直しは最後の手段にします（生理病理を考えて、選穴しているのだからそう簡単に変えられない）。

尚、治療効果を持続させるために7難の三陰三陽治療を行う、之に付いては現在臨床追試中であります。

治療を終了してから、検脈すると脈が崩れていることが有る。之を防ぐ為には、7難の三陰三陽治療を行うと脈が崩れない。

これは、脾虚証の患者が1・2月に治療する場合は少陽経が司るので、本治法を終了して脈が整っても締めくくりとして少陽三焦経の土穴と少陽胆経の土穴を補い脈が崩れない様にする。

肝虚ならば木穴と言うことになる。

《参考・引用文献》

『難経の臨床研究』 勝浦甚内著

『難経本義大鈔』 森本昌敬斎玄閑著 漢方鍼医会編